

三橋 寛治

毎年5月の連休が終わると7月中旬まで旅行代金さが下がる。季候も良い。それでこの時期に旅行することになっている。昨年は6月27日から12日間、中央ヨーロッパを旅行した。ベルリンを起点にポツダム、ライプツヒ、マイセン、ドレスデン、プラハ、ザルツブルグと南下し、そこからウィーン、ブダペストと東方に移動する移動型のパッケージツアーに妻と2人で申し込んだ。この地方はそれから2ヶ月後の8月には大洪水となり、いまでは観光価値が激減している。

この旅行は添乗員同行、全食事付で、個人旅行の緊張感に比べるとずいぶん楽であった。このあたりは以前は「東欧」と呼ばれていたが、ベルリンの壁崩壊後は「中欧」となり、ポーランド、ロシア、ルーマニア、ブルガリアあたりを「東欧」と呼ぶらしい。

参加者は全部で26名。50代が約7名で、あとは現役を退いた60代以上。最高年齢は78才の1人参加の女性という構成である。旅行中はグループメンバーとの会話が弾む。いままでの各自の旅行歴を聞くのは実に楽しい。実際の体験は本に勝る。失敗談、危険地帯情報やトラブル体験談など情報交換に忙しい。

今回の旅行は中世歴史旅行であり、また中世音楽旅行でもあった。

プラハではスメタナ・ドボルザーク、ザルツブルグではモーツァルト、ウィーンではヨハンシュトラウス、ブダペストではリストの曲に接し、若い頃に聴いた音楽を楽しんだ。しかし歴史物語のほうがはるかに興味深い。私個人はベルリンは壁崩壊前後に訪れてから久しぶりの3回目になる。ドイツの首都として都市再開発中というところである。ポツダム市で訪問したツェツィリエンホフ宮殿は「ポツダム宣言」が採択された場所で、NHKの「その時歴史は動いた」で取り上げられたばかりだったせいか記憶に深く刻み込まれた。歴史を動かす会合となった会議室とその会議室に接するスターリン、トルーマン、チャーチルの各控室の配置関係も興味深い。終戦前の7月20日前後にもう戦後の日本の取り扱いについて議論していたのだから勝てるはずがない。

この旅行での私の最大の関心事は、ハプスブルグ家の盛衰から第1次世界大戦への移行物語である。ハプスブルグ家の崩壊がきっかけとなって2つの世界大戦、冷戦時代、壁崩壊と続くストーリーはとても興味深い。

ハプスブルグ家は約550年続いた。女帝マリアテレジアや絶世の美女、皇后エリザベータの話は多くの方が詳しい。しかし華麗な帝国も皇后エリザベータの時代には崩壊の兆しが見え始めていた。皇帝ヨハン・ヨーゼフと皇后エリザベータの間に生まれた一人息子ルドルフが16才の女性と心中したことに発する。その心中した館はウィーン郊外にあたるマイアリングの狩猟場にあり、私たちはその館も訪問してきた。

ルドルフ皇太子には妻もあり1人娘もいた。その1人娘は皇后エリザベータの名を借りてエリザベータ・マリー・ヘンリエッテ・シュテファニー・ギーゼラと言った。1898年孫娘エリザベータが15歳のとき、皇后エリザベータはスイスを旅行中にブルジョア階級に反感を持つ暴漢に刺殺され、世相が慌ただしくなっていた(皇后61歳)。ひとりになった皇帝ヨーゼフは孫娘エリザベータを後継ぎにすることを考えたが、あまりにも若すぎることから、甥のフランツ・フェルディナンドを皇太子に選んだ。その後孫娘エリザベータは自らが選んだ軍人のオットー・ヴァインシュタインと結婚したいと主張し、皇后への道を辞退してしまう。1914年フェルディナンド皇太子がサラエボでの閱兵式でオーストリア・ハンガリー二重帝国の進出に反対する暴漢に暗殺された。

これに端を発して、オーストリアがセルビアに宣戦布告し、セルビアと同盟関係にあったロシアが参戦し、オーストリアと同盟関係にあったドイツが加わり、ドイツに反目していたフランス、イギリスが布告し、最後

にはアメリカまで参戦して第一次世界大戦に発展していった。ハプスブルグ家は皇帝ヨハンヨーゼフが86歳で亡くなると、にわかづくりの後継ぎ、フェルディナント大公の甥に当たるカール皇帝が即位したが力およばず550年続いた王朝はついに崩壊した。それをきっかけに王朝の管理下にあったチェコやハンガリーは競って独立した。しかしこれらの小国はその後の第2次世界大戦で大国ロシアに攻められその支配下におかれ、西側諸国から分断された。小国なるが故の運命をひしと感じたに違いない。ウィーンを中心とする「中欧」は「東欧」に組み込まれ消滅した。この時の苦い経験が現在のEUに繋がるパン・ヨーロッパ構想を生んだともいえる。その後ベルリンの壁崩壊後に再び「中欧」の呼称が復活してきている。

広大な敷地と優雅な宮殿で育ったハプスブルグ家最後の皇女エリザベートはその帝国の崩壊と共に一平民になり、民間の小さな住宅に住む経験まで味わって第2次大戦後の冷戦が激化する1963年に80歳の生涯を閉じた。彼女が20代のときのウィーンが華やかなりし頃、スターリンやヒトラーもウィーンの空気を吸いにきていた。先のボツダム会議ではスターリンがホスト役を果たしたのであるから、これら一連の歴史はそれほど古い話ではない。

ウィーンの郊外に十字の交差点がある。その交差点に立つと歴史の足音が聞こえるような気がする。そこを南に下るとアドリア海に、東に行けばブダペストへ、北に行けばベルリンへ、西にいけばパリへ行けた。ウィーンは交易の交差点であった。ベルリンの壁崩壊のきっかけを作ったハンガリーとオーストリアの国境開放地点ハゲッスホルムにも行ってきた。歴史は本当に興味深い。

ハプスブルグ帝国崩壊から壁崩壊までの歴史は、

元毎日新聞ウィーン支局長 塚本哲也氏著作の

「エリザベート ハプスブルグ家最後の皇女」(文芸春秋社 2,429円)

に詳しく書かれている。チェコやハンガリーの運命、ヒトラーやスターリンの野望、クーデンホーフ・カレルギエー氏のパン・ヨーロッパ構想などについても詳しく書かれている。ご興味のある方はぜひどうぞお読みください。

以上